





「司令、慌ててたとはいえ女性を机の下に隠すのはいかなものかと思えますよ」  
「うふふ」でも私が司令を誘惑するために服を脱ごうとしたタイミングで人が来てしまったのですから仕方がないですよ」



コン...

「あれでは司令が私を襲おうとしているようにしか見えませんものね」  
「それにしてもこいつは棚を片付けに来てくれた秘書艦の方には完全に死角で何をしても見えませんね」



「あら、こんなに大きくなさってどうしたんですか？  
まさか私の息がかかって興奮してしまいましたか？」  
「司令はとんだ変態ですね」  
でも仕方ありませんね、司令も男性ですものね」

ニヤッ

「こんなに大きくなったのは私のせいみたいですし  
責任を取らないといけませんね」  
「スポンのチャックを下ろしますね」  
あまり暴れると私がいつか知らぬのがバレてしまいますよ」



「ああ、予想以上に大きいですね！それでは失礼して……れろろろ」  
「くろくろくろろっ！れろろ、れろろ……んちゅんじゅんるるるるるるー！」

カッパッ  
カッパッ  
カッパッ

れろ  
れろ

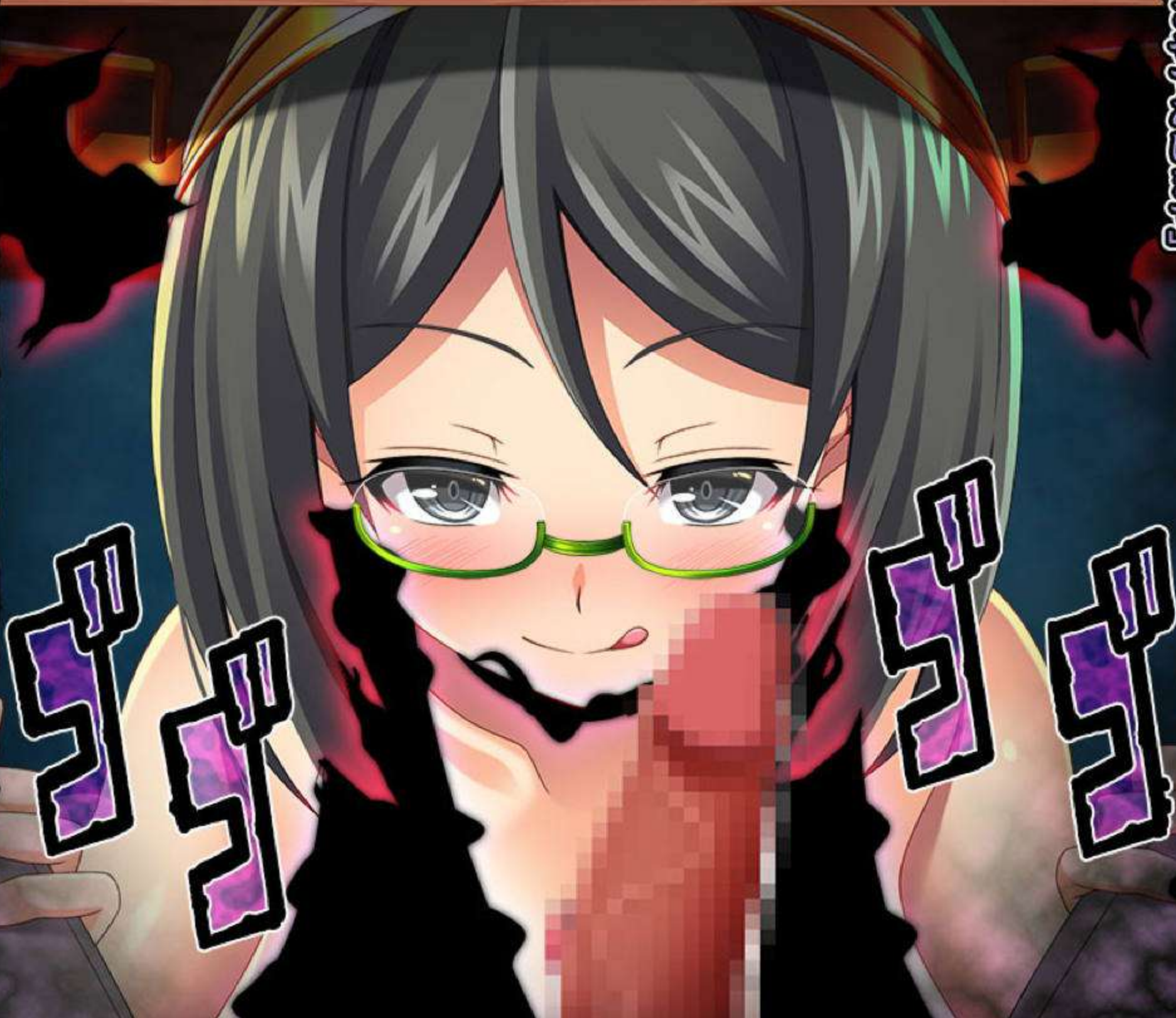
「ん……ん……じゅんるるる……じゅんるるるるるるるるるるー  
司令、まだ舌と唇を擦撫してゐるだけですか？  
「いんちゅんちゅん……じゅんるるるるるるるるるるー」







「残念ですが、射精はさせません」そんなに切ない顔してもダメです」  
「射精したいのですか？それでは私の言うことを無条件で聞いてくれたら  
射精させてあげます」



「条件はいたって簡単です、司令は軍高官に顔が利きますから  
そこで得た情報を私にも教えてくれればいいんです」  
「何に使うかは実際に見てもらおうのがいいですね」



「これが本当の私ですよ♪つまり私霧島は  
この鎮守府に派遣されたスパイなのです♪」  
「あ、叫んだりしたらこのおチンポを噛み切りますよ♪  
それにスパイは私だけではないですよ♪」

ニヤッ

「どうしますか司令？私をスパイとして捕まえますか？  
それとも私の言うことを素直に聞いてくれますか？」  
「賢明な判断ですよ♪よかったですね、女の子にならずに済みましたよ♪」



「それじゃあ利回な命令には」

「寝美をあげないとつけませんねー…あーむー!」

「れえーろれるる、れれるる、れえーえろ…れれえーんっ…んっ…んっ!」

カッパッ  
カッパッ  
カッパッ

れろ  
れろ

「私の胸をいっせいに揉むの聞かしてさっさと」

「いっせいに揉むの聞かしてさっさと」

「ほら、裏筋も…れろるる、れろるる、れろるる」

「いっせいに揉むの聞かしてさっさと」







「ほらほら、ここまで我慢できたら後は耐えれば耐えるほど  
快楽が高まっていきますよ」  
「気持ちいいですか？気持ちいいですよ」  
今司令は最高の快楽を味わっています」

「じゅずっ、ジュルルズッーちゅっば、ちゅっばんっ、ジュズズズッ…  
じゅるるる、ちゅっばちゅっばー」  
「もう耐えられませんか？」  
それでは思う存分私の回の中に出ていってください」

ちゅっば

ちゅっばん

ちゅっばん

ちゅっばん

ちゅっばん

ちゅっばん  
ちゅっばん



























